

〈音楽〉

思いや意図をもって表現する力を育てる指導の工夫 —— 音楽の仕組みを生かした音楽づくりの活動を通して（第5学年）——

浦添市立浦添小学校教諭 金城 貴 裕

I テーマ設定の理由

新学習指導要領音楽科の内容構成は、現行通り表現と鑑賞の2領域で構成しつつ、表現及び鑑賞に関する能力を育成する上で必要となる〔共通事項〕が新たに設置された。さらに、現行と異なる点は、表現領域を「歌唱」「器楽」「音楽づくり」の3つの活動分野別に示し、それぞれの活動の指導事項として、「思いや意図をもって歌う、演奏する、音楽をつくる」ことが示されたことである。

これは、中央教育審議会答申（平成20年1月）において、音楽科における改善の基本方針として、「音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること」が示されたことによるものである。「思いや意図をもって表現する」ということは、児童が主体的・創造的に音楽活動にかかわっていくことであり、思考・判断し、表現する一連のプロセスを大切にすることを示すものといえる。

これまで、創作（音楽づくり）の活動において、ボディパーカッションによる即興リズムづくり活動や、音符や休符を組み合わせたリズムづくり活動、曲の一部を変奏する活動に取り組んできた。授業において児童は、「こんな音楽にしたい」という願いをもち前向きに活動するものの、具体的な音楽づくりの方法がつかめず、思い通りの音楽がつかれないといった状況が見られた。これは、音楽に対するイメージが漠然として明確でなかったこと、〔共通事項〕に示された「音楽を特徴付けている要素（音色、リズム、速度）」や「音楽の仕組み（反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係）」などに対する指導が不十分であったことが要因ではないかと考える。

坪能由紀子(2009)は、「音楽をつくるためには、音楽がどんなふうに行っているかをよく『聴き取る』ことが大切であり、よく『聴き取る』ためには、実際に自分で音楽をつくる経験が大きな助けとなる。」と述べている。「音楽がどんなふうに行っているか」を聴き取るということは、〔共通事項〕の音楽の仕組みの理解と大きくかわるものであると考える。つまり、音楽の仕組みを理解することが、「音楽がどんなふうに行っているか」について気づくことにつながり、実際に音楽をつくる場面において重要な手がかりになるといえる。

そこで、本研究において、音楽の仕組みを生かした音楽づくりの活動を展開したいと考えた。児童が反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係などの音楽の仕組みを理解することによって、音楽のイメージがより明確になり、音を音楽に構成するヒントを得られることが期待できる。実践においては、鑑賞活動と関連させ、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを理解させ、音楽がどんなふうに行っているかに気づかせ、聴き取らせる活動を行いながら、音楽づくりの活動に取り組ませていきたい。

「こんな音楽にしたい」といったイメージを持ちながら、具体的な音楽づくりの方法がつかめず思い通りの音楽がつかれなかった児童にとって、音楽の仕組みに気づき、それらを生かし、思考・判断し、表現する一連のプロセスを大切に音楽づくりの活動を行うことで、思いや意図をもって表現する力が育つであろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

音楽づくりの活動において、反復や問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係など音楽の仕組みに気づき、それらを生かした音楽づくり活動を行うことで、思いや意図をもって表現する力が育つであろう。

II 研究内容

1 思いや意図をもって表現する力とは

思いや意図をもって表現するとは、「表現に対する自分の明確な考えや願い、意図をもって表現すること（新学習指導要領解説2008）」とされている。これは、児童が歌を歌ったり、楽器を演奏したり、音楽をつくったりする際に「こんな音楽にしたい」というイメージをもち、主体的に考え創意工夫して活動に取り組むことであるといえる。

奥泉徹(2009)は、思いや意図をもって表現することについて、「児童が、単に教師からの一方的な

指示や、友達がそうしているから自分もそうするといった受身的な態度で活動するのではなく、自分なりの考えや願いをもって、主体的な態度で活動することである」と述べている。このことは、音楽の表現活動において、教師の描いたイメージを表現する活動に重点をおくのではなく、児童が自分なりのイメージを描き、そのイメージに合う表現を目指して思いや意図をもって試行錯誤することの大切さを示唆しているといえる。

以上のことから、児童が「こんな音楽にしたい」というイメージを明確にもち、主体的に思考・判断しながら音楽をつくりあげることのできる力が、思いや意図をもって表現する力であると捉える。

2 音楽づくりについて

(1) 音楽づくりとは

『音楽づくり』とは、児童が自らの感性や創造性を発揮しながら自分にとって価値のある音楽をつくることである（新学習指導要領解説2008）。ここで示された「自分にとって価値のある音楽」とは、楽曲に対する自分なりのイメージに合う表現を目指して、試行錯誤することによって生み出された音楽と捉えることができるだろう（図1）。

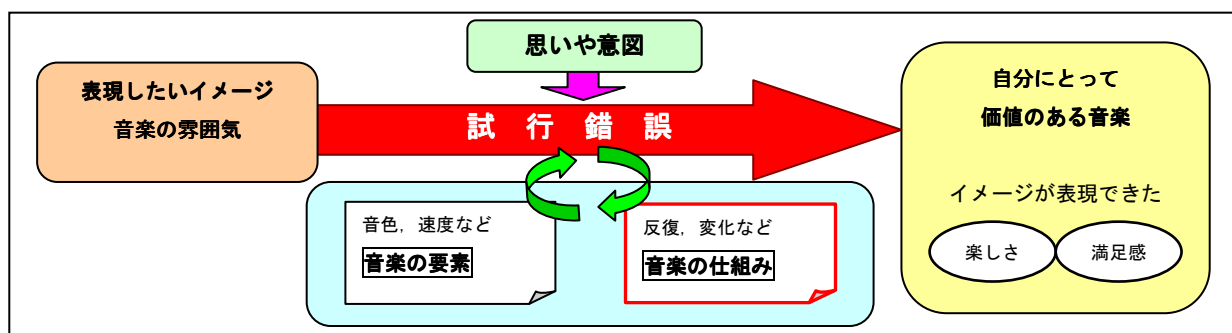


図1 価値のある音楽をつくる過程

山口亮介(2008)は、「音楽づくりの活動で進むべき道は二つある」とし、それは『音遊び』『即興的な表現』と『音楽の仕組みを生かした音楽づくり』の道である」と述べている。前者の「音遊び」や「即興的な表現」とは、声や身近な楽器、または児童が直感的に鳴らした音や偶然によって生まれたリズムなど、様々な音や音楽のよさ、面白さを感じ取る活動である。後者の「音楽の仕組みを生かした音楽づくり」とは、反復や変化といった音楽の仕組みを生かしながら、思いや意図をもって音楽をつくる活動である。

本研究においては、両者のうち「音楽の仕組みを生かした音楽づくり」に焦点を当てて、音を音楽に構成していく音楽づくり活動を実践していきたい。この活動を通して、身の回りの様々な音の面白さに気付いたり、音はどのように成り立っているか、音はどのようにしたら音楽になるのかなど、楽しみながら学ぶことができるような指導の工夫を行っていききたいと考える。

(2) 〔共通事項〕と音楽づくりの関連

新学習指導要領（2008）において、表現及び鑑賞の活動の支えとなるものとして〔共通事項〕が新設された。この〔共通事項〕の内容は「ア：音楽を形づくっている要素」と「イ：音符、休符、記号や音楽にかかわる用語」で構成されている。また、このうち前者の「ア：音楽を形づくっている要素」は、更に(ア)音楽を特徴付けている要素と(イ)音楽の仕組みの二つに分類される（図2）。

小原光一(2008)は、表現及び鑑賞の能力を育成していくために共通に必要な指導内容が〔共通事項〕であるとし「表現及び鑑賞の各活動の支えとなる『聴き取る力』及び『感じ取る力』を、それぞれの活動に生きて働く力として明確にした」と述べている。これは、〔共通事項〕と各活動を関連させた学習を行うことで音楽の要素を聴き取り、それらの働きによるよさや面白さを感じ取ることのできる力がはぐくまれることを意味している。これらのことから、音楽づくり活動と〔共通事項〕とを関連させた指導計画を作成し、音楽の仕組みを手がかりとして、音を音楽に構成していく活動を行っていききたいと考えている。活動の内容としては、楽曲の中から〔共通事項〕の音楽の仕組みを聴き取るといったような、鑑賞活動と関連させた活動を行いながら、音楽の仕組みを生かした音楽づくり活動を目指していきたい。

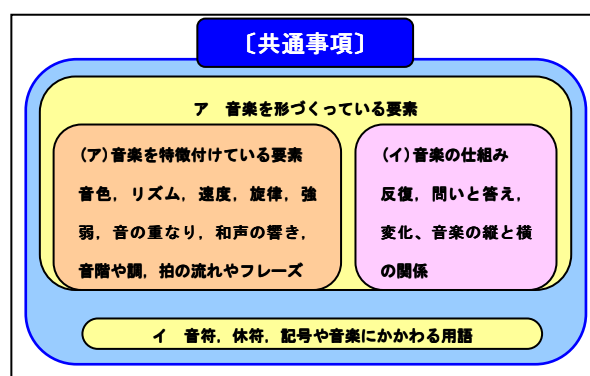


図2 共通事項の構成

(3) 音楽の仕組みとは

音楽を聴いたとき「軽快ではずむようなリズムの繰り返しの後、迫力のある雰囲気になった。」というイメージをもった場合、その音楽を特徴付けている要素は「速度、リズム、強弱」であり音楽の仕組みは「反復、変化」である。このように、音楽には「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」が含まれており、これらの「共通事項」を「聴き取る力」や「感じ取る力」は音楽づくりにおいて有効な手がかりになることが期待できる。例えば、坪能由紀子(2009)は、「効果音的なものをつくる活動に陥りがちであった『音楽づくり』が、『音楽の仕組み』を基盤とすることによって、音を音楽に構成する手だてを得ることになった。」と述べている。

音楽の仕組みについて、具体的内容を以下のようにまとめた(図3)。

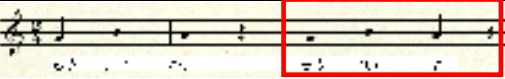
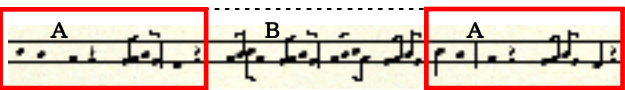
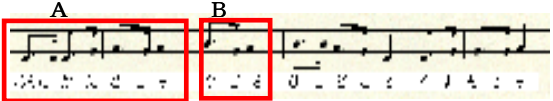
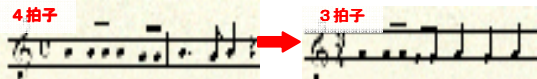
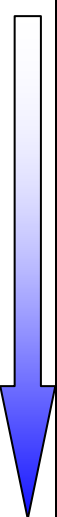
音楽の仕組み	具 体 的 内 容 (例)	
反 復	①リズムや旋律の繰り返し	 ★最初の旋律を繰り返す。
	②再現による反復 (ABA形式)	 ★Bの後にAが再現する。
問いと答え	①模倣	 ★AとBが、模倣による問いと答え。
	②対照	 ★AとBが、対照による問いと答え。
	③合いの手	 ★歌の合間に手拍子を入れる 合いの手。
変 化	①拍子の変化 ②調の変化 ③変奏曲 など	 ★4拍子から3拍子へ変化させる。
音楽の縦と横の関係	★音の重なり方を縦時間的な流れを横カノン形式	 ★同じリズムを、追走して重ねる。

図3 音楽の仕組みの具体的内容

3 思いや意図をもった音楽づくり活動のプロセス

本研究では、思いや意図をもった音楽づくり活動のプロセスとして、以下のように4つのステップを設定した(表1)。第1段階の鑑賞活動では、身体表現を取り入れ楽しみながら、聴き取る活動を行っていききたい。また、第3段階のイメージを音にする活動ではリズムパターンや五音音階を提示し、段階的に見通しを立てて思いや意図をもった音楽づくり活動を行えるよう、実践していききたい。

表1 思いや意図をもった音楽づくり活動のプロセス

段階	活動項目	活 動 内 容
	1 聴き取る活動	- 鑑賞活動を通して、[共通事項]「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」などを聴き取る。 - 聴き取ったことを聴き取りカードにまとめる。
	2 イメージを描く活動	- つくりたい音楽のテーマを決める。 - テーマに沿って、イメージを言葉で表す。
	3 イメージを音にする活動	- その言葉に合う音やリズムを選び、即興的に短い音楽をつくる。 - 自分がつくった短い音楽に「音楽の仕組み」を生かして、全体の構成を考える。 - つくった音楽のイメージに合う楽器を選んで、まとめていく。
	4 作品を発表し批評する活動	- 完成した作品を発表する。 「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」を聴き取り、それらと曲想との関連をまとめる。 - それぞれのつくった音楽が、イメージに合っているかどうか、お互いに批評する。

Ⅲ 指導の実際

1 題材名 「イメージにふさわしい音楽をつくろう」 教材名 「海の音楽をつくろう」

2 題材の目標

- (1) 音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みに気づき、聴き取ることができる。
- (2) 自分なりのイメージをもって、音楽をつくることができる。

3 題材の評価規準

ア. 関心・意欲・態度	イ. 音楽的な感受や表現の工夫	ウ. 表現の技能	エ. 鑑賞の能力
・音楽の仕組みや構成を工夫しながら、進んでまとまりのある旋律をつくって表現しようとしている。	・様々な旋律や曲の構成、音楽の仕組みのよさを生かした表現の仕方を工夫している。	・音やリズムを組み合わせて自分の音楽をつくり、音楽の仕組みを生かして工夫しながら表現している。	・主な旋律の反復、変化や対照など、音楽の仕組みと楽曲全体の曲想の変化とのかかわりのよさや特徴を感じ取って聴く。

4 指導計画（全三次、8時間）太枠本時

次	時	主な学習内容	教材	共通事項	評価規準				評価方法
					ア	イ	ウ	エ	
一	1	・音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを聴き取る。 ・各自が感じ取った、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みをまとめて発表する。	剣の舞	旋律反復	◎			◎	聴き取りカード 行動観察
二	2 3 4	・グループでつくりたい音楽のテーマを決め、イメージカードにまとめる。 ・各自がテーマに合わせて短い詩をつくる。 ・五音音階の音やリズムを選んで、イメージに合う音楽をつくる。 ・つくった音楽を持ち寄って、グループでまとめていく。	海の音楽をつくろう イメージカード	旋律反復	◎	◎			イメージカード 音楽づくりワークシート 行動観察
	5 6	・音楽の仕組みを用いて、まとまりのある音楽にしていける。 ・自分たちがつくった音楽を身近な楽器で演奏して音を確認し合う。	音楽づくりワークシート	旋律反復		◎	◎		音楽づくりワークシート 行動観察
三	⑦	・つくった音楽を中間発表する。 ・それぞれのグループがつくった音楽がイメージに合っているかお互いに批評し合う。	音楽づくりワークシート	反復問いと答え	◎		◎	○	行動観察 演奏 感想発表
	8	・友達のアドバイスを受けて、さらに工夫して音楽を仕上げる。 ・工夫した音楽を発表し、お互いの音楽のよさや面白さを味わう。	音楽づくりワークシート 感想カード	反復問いと答え	◎	○		◎	行動観察 演奏 感想発表

5 本時における評価規準

主な学習活動	評価規準とその方法	学習活動における具体的評価基準		
		A 十分満足できる	B 概ね満足できる	C 支援の具体的方法
①自分たちのつくった音楽を楽器の音色や表現の仕方を工夫しながら練習する。	・自分たちのつくった音楽のイメージに合う楽器を選び、友だちと協力しながら練習に取り組むことができる。(ア) 【行動観察・演奏聴取】	・自分たちのつくった音楽のイメージに合う楽器を選び、友だちと協力しながら練習に取り組むことができる。	・自分たちのつくった音楽を友だちの意見を聞きながら練習することができる。	・自分たちのつくった音楽を友だちと一緒に練習できるよう助言する。
②自分たちのつくった音楽を中間発表する。	・自分たちのつくった音楽を演奏することができる。(ウ) 【行動観察・発表】	・自分たちのつくった音楽を演奏することができる。	・自分でつくった旋律を演奏することができる。	・自分のつくった旋律を階名唱させ演奏できるよう支援する。
③友だちのつくった音楽の良いところを見つける。	・友だちのつくった音楽の曲想のよさや、反復など音楽の仕組みを感じ取ることができる。(エ) 【感想カード】	・友だちのつくった音楽のよさや反復などに気づき、自分の音楽づくりに生かすことができる。	・友だちのつくった音楽のよさに気づくことができる。	・鑑賞のポイントを示し友だちのつくった音楽のよさに気づかせる。

6 本時の学習

(1) 本時のねらい

- ・つくった音楽の音やリズムを確かめながら、友達と協力して練習することができる。
- ・友だちの演奏を聴いて音楽づくりの工夫に気づき、そのよさを感じ取ることができる。

(2) 本時の展開（7／8時間）

学 習 活 動	◇指導上の留意点 〔共通事項〕	評価方法
○既習曲を歌う。 「いつでもあの海は」 ○めあてを確認する。	◇教師が伴奏し、のびのびと歌わせる。	
音楽の工夫を考えてイメージに合う演奏をしよう。		
○つくった音楽をグループで練習する。 ・鍵盤ハーモニカで、音を確かめる。 ○楽器を選んで、グループ練習する。 ・イメージに合う楽器で練習する。 ・グループで考えた工夫を使ってイメージに合う演奏にしていく。 ○つくった音楽を、グループごとに中間発表する。 ○それぞれの工夫のよさについて、意見交換をする。	◇各グループがつくった音楽の音やリズムを正しくつかめているか確認させる。 ◇各グループをまわって活動の様子を観察し、児童がよりよい表現をめざすことができるように助言する。〔反復、旋律、音色〕 ◇それぞれのグループのテーマや工夫のポイントを板書して明らかにする。 ◇それぞれのグループがつくった音楽がイメージに合っていたか、どんな工夫が使われていたかを気づくことができるよう配慮する。	行動観察（ア） 演奏聴取（ウ） 演奏聴取（ウ） 表情・発言観察（エ）
○まとめと次時の予告	◇分かった・できた・思ったことをワークシートに書く。	感想カード

7 仮説の検証

研究の仮説に基づく授業実践において、音楽の仕組みに気づき、それらを生かした音楽づくり活動を行うことで思いや意図をもって表現することができたか、授業の実際や行動観察、ワークシート、児童の作品、児童の感想、検証前後の実態調査等から分析・考察を行う。その際、思いや意図をもった音楽づくり活動のプロセスに基づいて、児童の変容を検証する。授業を行うにあたり、指導計画全8時間の授業仮説を以下のように立てた（表2）。

表2 題材名「イメージにふさわしい音楽をつくろう」全時の仮説表

活動のプロセス	時	学習内容	授業仮説
第1段階 聴き取る活動	1	「つるぎの舞」から「音楽の諸要素」や「音楽の仕組み」を聴き取る	○「つるぎの舞」を鑑賞する場面において、音楽から感じ取った雰囲気と「音楽を特徴付けている要素」「音楽の仕組み」とのかかわりについて、身体表現を取り入れ、視覚的に気づかせることで、より深く聴き取ることができるであろう。
第2段階 イメージを描く活動	2	テーマに沿ってイメージを言葉に表す	○「海」を言葉で表す場面において、思い浮かんだ言葉をつなげて詩に表すことで、具体的な音楽づくりのイメージを描くことができるであろう。
第3段階 イメージを音にする活動	3 4	イメージに合う音楽をつくる	○描いたイメージを音にする活動において、リズムパターンや五音音階を利用することにより、イメージに合う音楽づくりができるであろう。
	5 6	各自がつくった音楽を、「音楽の仕組み」を生かしてグループでまとめていく	○音楽をまとめる場面において、イメージに合う音楽の諸要素や仕組みを利用することで、創意工夫して思いや意図をもった音楽づくりができるであろう。
第4段階 作品を発表し批評する活動	7	中間発表会をし、お互いの演奏を批評する	○中間発表会をする場面において、つくった作品を演奏したり、友達の演奏を聴き、批評し合うことで、音楽のよさや雰囲気を感じ取ることができるであろう。
	8	最終発表会をし、お互いの演奏を批評する	○中間発表会における友達のアドバイスを受け、工夫した作品を最終発表することで、互いの音楽のよさや面白さを味わうことができるであろう。

(1) 「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」を聴き取る活動の検証（第1時）

検証授業の第1時は、「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」を聴き取る鑑賞の活動を行った。教材として、曲想や構成に明確な特徴を持つ「つるぎの舞」を選択した。まず、はじ

めに「つるぎの舞」の部分鑑賞を、身体表現を取り入れて行った。「つるぎの舞」の前半部分に表れる特徴的なフレーズ（図4④）を、剣を振り下ろす動作で表現して、楽曲を体で感じ取りながら聴き取る活動を行った。その結果、音楽の中に同じフレーズが何回も使われていることに気づくことにつながった。また、部分鑑賞を繰り返すことで「速度・音高・旋律」など諸要素に関する発言が多く出され、児童が「音楽の諸要素」を聴き取ることに繋がった。



図4 「つるぎの舞」(ハチャトゥリアン作曲)のフレーズ



図5 3部形式を理解する板書

次に「つるぎの舞」の3部形式を視覚的に理解できるように、図5に示したように、3つに区分して板書する工夫を行った。3つの部分について、当初「ABCに分かれている」と発言していたが「音楽の諸要素」と「曲想」とのかかわりについて話し合う過程で「最初の部分と最後の部分は繰り返した」「曲の雰囲気が同じだ」「最後はCじゃなくてAだ」といった3部形式（音楽の仕組み）に気づく発言が出された。

このことから、本時の鑑賞活動によって児童が「つるぎの舞」の「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」に気づき、聴き取ることができたと捉えることができる。また、児童の感想からも「速さ、音の大きさ、音階、旋律」など「音楽の諸要素」や「ABAという3部形式」を聴き取ることで、「音楽の仕組み」に対する理解が深まったことが読み取れる（表3）。

表3 児童の感想（第1時）

- ABA形式、五音音階の二つの意味が分かった。「つるぎの舞」にはいろいろな仕かけがあると思った。
- この曲は、音が大きくなったり小さくなったりして、テンポも速くて忙しい曲だなと思った。
- はずむような曲で、最初は打楽器の音から始まっている。同じふしが何度も使われている。

(2) イメージを描く活動の検証（第2時）

本検証授業においては、児童一人一人がつくった短い音楽を持ち寄って、グループで一つの音楽にまとめていく音楽づくり活動を行うこととした。そのために、全体でつくる音楽のテーマを「海」とし、それぞれが音楽として表現したい「海」のイメージを言葉や詩で表す活動を行った。「海」というテーマに対して、子ども達からは「キレイな海、気持ちいいな」「海の中、キラキラ光る」という言葉が出てきた。これまでの音楽づくりの活動において、つくりたい音楽のイメージが漠然としていて思い浮かばないという実態が見られたが、言葉で表すことで、言葉に合う音、響き、リズムを選び出すといった「イメージを音にする活動」（プロセス3）につながっていった。

これらのことから、イメージを描く活動において言葉で表現することは有効であったと捉える。

(3) イメージを音にする活動の検証

① 短い音楽をつくる活動の検証（第3時・4時）

検証授業の事前アンケートにおいて「音楽づくりで困ることは何ですか」の問いに対して「方法が分からない」と回答した児童が、46%という結果であった。そこで、音楽づくりの具体的方法として3種類2小節のリズムパターン（図6）と、五音音階で旋律をつくることを提示した。

「海の中キラキラ光る」という言葉をイメージし



図6 2小節のリズムパターン

た児童は、「キラキラ」という言葉の響きに合わせてAのリズムパターンを選び、図7に示した音楽をつくった。言葉の響きを意識してイメージに合う音を選び、試行錯誤してつくった音楽は音の高さが自然な響きになっている。

これらのことから、「方法が分からない」といった児童に対して、リズムパターンや五音音階など、具体的な音楽づくりの方法を提示することで、描いたイメージを音楽にする活動がスムーズに行えたと捉えることができる。

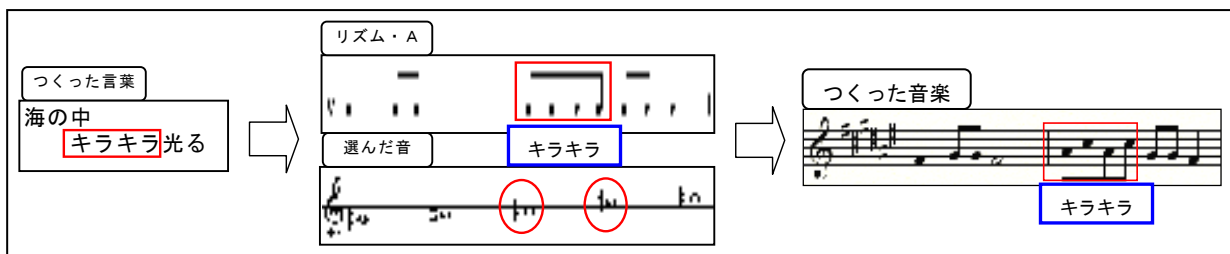


図7 イメージを音にするプロセス

② 音楽の仕組みを生かして音楽をまとめていく活動の検証（第5時・6時）

検証授業第5時では、各自がつくった音楽を短冊に書かせ、グループで一つの音楽にまとめる活動を行った。その際、各グループの曲名を考えさせ、グループのイメージの統一を図った。それぞれがつくった音楽を持ち寄ってまとめていく過程では、「反復」「問いと答え」など「音楽の仕組み」を生かして、試行錯誤する姿勢が見られた（写真1）。

たとえば、曲名を「ポップな海」としたグループは「A君の音楽とBさんの音楽を組み合わせたら、始まる感じと終わる感じになる」といった理由から、最初と最後の部分に取り入れている。これは「音楽の仕組み」の「反復」である。また「CとDは同じリズムだから、2つ並べて答える感じにしよう」というように、動きのある付点のリズムを並べることで、旋律に対照的な関係をつくっている。これは「音楽の仕組み」の「問いと答え」である。

このように、互いに意見を出し合い「音楽の仕組み」を生かして創意工夫しながら、自分たちのイメージに合う音楽をつくらうとする主体的な音楽づくりの活動を行っていることがわかる（図8）。児童の感想には「音楽をつなぎ合わせたりリズムを合わせるのが難しかった」「誰のつくった音楽を繰り返した方がイメージに合うか話し合ってためた」など「音楽の仕組み」を生かして試行錯誤しながら、思いや意図をもって音楽をまとめていった様子が述べられていた。

(4) 作品を発表し批評する活動の検証（第7時・8時）

検証授業第7時と第8時は、各グループの作品を演奏し発表する活動を行った。実際の演奏においては、曲名と音楽をまとめる上で工夫した点を述べた後、演奏を行った。演奏に対して「さわやかな音色の海」と曲名をつけたグループは、「クライマックスは強く大きな音にしたい」といった演奏表現に対する思いや意図を述べていた。また、「キラキラ光る夏の海」と曲名をつけたグループは、「やわらかい音色で演奏したいから、速度は遅いイメージ」といった表現の工夫を発表していた。各グループの発表を聴いた児童の感想には、「3段目のクライマックスの部分はテンポが速くて盛り上がっていた」「1段目と2段目は、繰り返しを使っていておもしろい」など、互いの演奏について根拠を述べながら、批評し合う活動が見られた。

このことから、「音楽の仕組み」を生かして創意工夫しながら音楽づくりを行ったことで、「音楽はどのように成り立っているのか」「音はどのようにしたら音楽になるのか」などに気づいて批

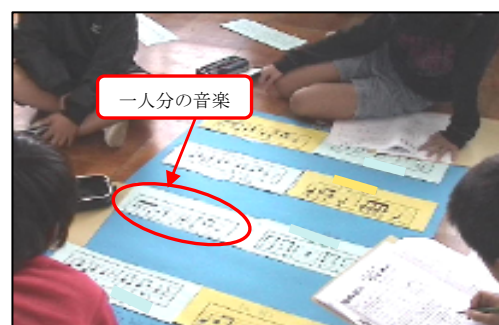


写真1 音楽をまとめる様子

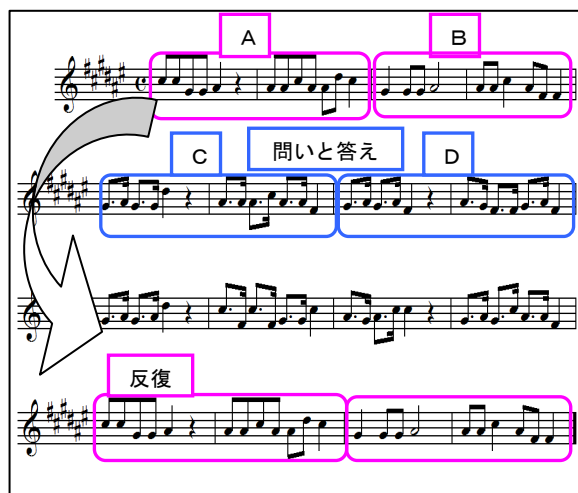


図8 児童の作品「ポップな海」

評する活動につながったと捉える。

(5) 検証授業前後の実態調査結果について

対象児童の第5学年（33名）に対して、検証授業の事前・事後に音楽を聴き取る力及び感じ取る力のたしかめテストを実施した。その正答率の結果は、図9の通りである。（ア）「音楽を特徴付けている要素」の「フレーズ」、「ハーモニー」など、いずれの項目も大きく伸びている。また（イ）「音楽の仕組み」の「反復」は34%から94%、「問いと答え」は41%から94%、「変化」については63%から84%に伸びている。

これは、鑑賞活動において体で楽曲の特徴を感じ取ることでできる身体表現を行ったり、楽曲の部分鑑賞を繰り返すことで、（ア）（イ）を聴き取る力・感じ取る力の向上につながったと捉えることができる。

次に「音楽の仕組み」について聴き取ったことを、ワークシートにまとめた記述を、表4にまとめた。検証前には簡単な短い記述だったが検証後には記述が丁寧になっており聴き取ったことに関する根拠を示して、感じ取ったことを具体的にまとめているなど、変容していることが

わかる。これは、各自がつくった音楽を持ち寄り、一つの音楽にまとめていく活動で、互いに意見を出し合い「音楽の仕組み」を生かして創意工夫しながら、音楽づくりの活動を行ったことで「音楽の仕組み」を聴き取る力・感じ取る力の向上につながったと捉えることができる。

表4 「音楽の仕組み」を聴き取る力・感じ取る力の変容を示した感想

音楽の仕組み	検 証 前	検 証 後
反復	○同じふしが、何回も使われている。	○なめらかな感じがする曲で、いつまで続くの？と思う位、低い音が繰り返されていた。
問いと答え	○伴奏が合いの手に似ている。	○ホルンとバイオリンが、会話しているような感じがする。
変化	○同じふしだけど演奏の仕方が違っている。	○音色や速さ、音符が変わったりして、こんなに曲の印象が変わるとは思わなかった。

以上のことから、一連の検証授業を通して「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」を聴き取る力と、それらはたらしきによって生み出される、音楽のよさや雰囲気を感じ取る力が高まり、思いや意図をもって表現する力が向上したといえる。

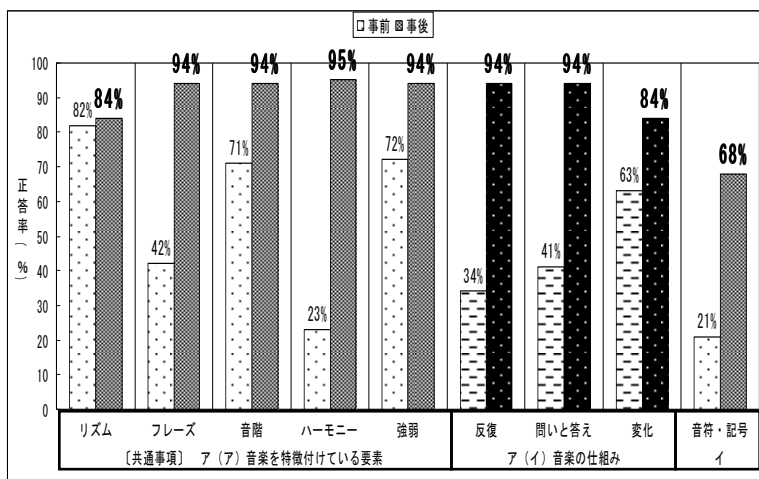


図9 たしかめテスト正答率の比較

IV まとめと今後の課題

本研究は、「思いや意図をもって表現する力を育てる指導の工夫」をテーマに、鑑賞活動と音楽づくり活動を関連させ、音楽の仕組みを生かした音楽づくり活動を通して研究を進めてきた。その成果と課題をまとめる。

1 成果

- (1) 児童が自分なりのイメージを描き、そのイメージに合う音楽にするために聴き取った「音楽の諸要素」や「音楽の仕組み」を利用することで、思いや意図をもった音楽づくり活動につながり、自分にとって価値のある音楽をつくることができた。
- (2) 音楽づくり活動のプロセスを設定し、授業実践を行ったことで、段階的に見通しをもって音楽づくり活動を行うことができた。

2 課題

- (1) 児童がつくった音楽を楽器で演奏する際、表現の工夫をするための十分な時間を設定する。
- (2) 音楽の仕組みを生かした音楽づくり活動と鑑賞活動とを関連させた年間指導計画を作成する。

〈主な参考文献〉

- 佐藤日呂志・坪能由紀子 2009 『小学校新学習指導要領の展開 音楽科編』 明治図書
 山口亮介 2008 『音楽鑑賞教育』 財団法人音楽鑑賞教育振興会
 飯田清美 2002 『続・向山型で音楽授業』 明治図書